# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 10 号

木津川河床遺跡発掘調査概要黒坪											一樹 1
古代エジ	Щ	雅人 7									
一昭和58	年度発	掘調査	<b>E</b> 略報一								11
4.	中	Щ	城	跡	9.	長 岡	宮	跡第	140	次	
5.	千代	川遺	跡第4	次	10.	長岡京	京跡	左京第	¥ 103	次	
6.	千代	川遺	跡第5	次	11.	長岡京	京跡	右京第	127	次	
7.	上	中	遺	跡	12.	長岡京	京跡	右京第	3 141	次	
8.	長岡	宮跡	第 134	次							
府下遺跡	紹介	16. 尹	一波国分	寺跡 17.	樫	原廃寺					24
長岡京跡	調査だ	より…									28
センター	の動向										32
府下報告	書等刊	行状资	己一覧…								34
受贈図書	一覧…										38

## 1983年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 木津川河床遺跡



(1) 発掘区全景 (東から)



(2) 1号・2号竪穴式住居跡(南西から)

## 木津川河床遺跡発掘調査概要 <図版>

黒 坪 一 樹

#### 1. はじめに

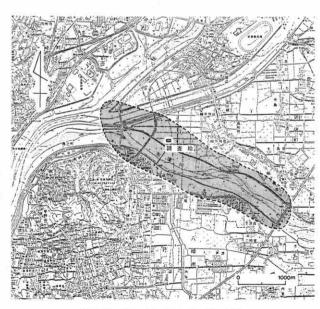
木津川河床遺跡は、昭和57年度にも当調査研究センターが発掘調査を実施し、弥生時代後期から古墳時代前期(庄内併行期)にかけての遺物が出土した。調査地は、木津川・宇治川・桂川の三河川の合流点に近く、地形的にみても標高約10mと低い湿地帯であるにもかかわらず、遺物の存在を確認できた。今回の調査は、昨年度の成果を踏まえて、低湿地遺跡(生活跡)の存在を確認すべく、実施したものである。その結果、おもに古墳時代前期から後期に至る多くの資料を得ることができた。

調査地は、八幡市八幡小字源野・焼木に所在し、京都府木津川流域下水道浄化センター管理棟部分の建設予定地にあたる。当地は、昨年の調査地と道路(仮設)を隔てた南側の水田部分で、すぐ近くに木津川の堤防が迫っている(第1図)。調査は、1次・2次調査と期間を分けて行い、主任調査員長谷川達、調査員黒坪一樹が主に担当した。

#### 2. 調査経過

今回, 実際に掘削した面積は, 約1,100㎡ である。調査対象地が, かんがい用水路(素

掘り)の走る水田であるため、調査はまず、発掘区周縁部に排水溝を掘り、その中の溜り水を抜き出すことから始めた。掘削は、重機により発掘区南西隅から強いで、西壁と北壁を上字形に掘り進んだ。深さ約1.5mの地点で奈良~平安時代の須恵器壺・土師宏等が出土した。従って、この掘削深度で発掘区全体を一旦そろえ、人力で遺構の有無を確認しながら面的



第1図調查地位置図

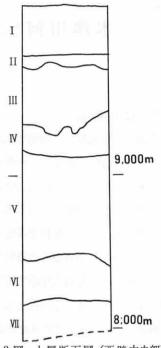
に掘り下げた。地表下約 1.8~2.0 m 付近で古墳時代の遺物が出土し始めても、暗茶褐色粘質土の地に掘り込まれた暗黒褐色粘土のつまった遺構は、容易に識別できなかったが、慎重に精査を行い、部分的に焼土を有するいびつな四角形の竪穴式住居跡や、大小の土城等、古墳時代後期の遺構と遺物を確認した。さらに、作業の最終段階で古墳時代前期の土器溜り(布留式)を検出した。

調査の結果,10基にのぼる竪穴式住居跡の構造と ともに集落全体の広がりを捉えることができた。今 後の木津川河床遺跡調査の出発点と言えよう。

#### 3. 調 查 概 要

#### (1) 検出層位

本遺跡の基本的な層位は、第2図に示したとおりである。II層は、水田耕作土により削平されているが、この灰白色極細砂はすべての壁面でみられ、近世以降の木津川の氾濫による洪水堆積物である。II



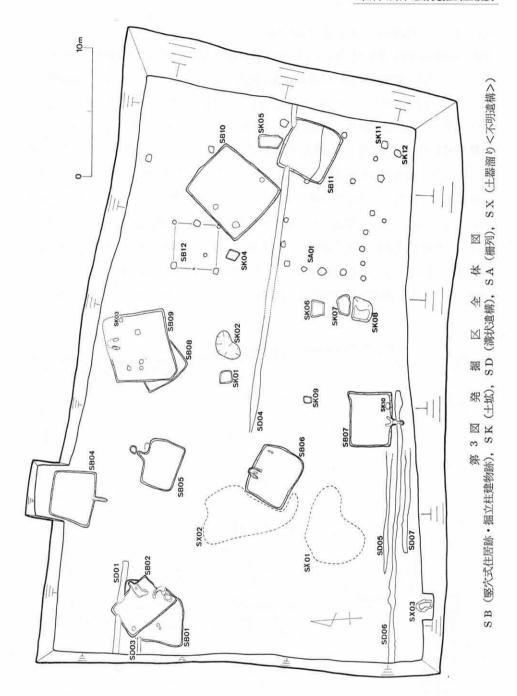
第2図 土層断面図(西壁中央部) I.水田耕作土 II.灰白色極細砂 II.濃灰褐色粘土 IV.暗灰褐色粘 土 V.暗茶褐色粘質土 VI.暗灰 色粘質細砂 VII.暗灰色細砂

層は、有機物を多く含み、下位にいくほど植物の腐植による赤褐色の斑紋が顕著に見られる。V層が古墳時代後期の遺構面を含む遺物包含層である。後背湿地における自然流路で運ばれた泥が、極めて長い時間をかけて堆積したと思われる。VI層は、極細砂とも言えるよくしまった無遺物層である。VI層は、VI層と同様の無遺物層で、完全な細砂となる。なお、古墳時代前期の土器溜りは、VI層直上で認められ、沼地状の落ち込みに遺棄されたものと考えられる。

#### (2) 遺構と遺物

検出遺構は,第3図に記したように,竪穴式住居跡10基・土拡10基(住居跡内のものは除く)・掘立柱建物跡1棟・柵列1基が古墳時代後期,溝状遺構7条が中世,土器溜り2か所が古墳時代前期にそれぞれ属す。

 ${\bf SB\,01\cdot02}$  は、2基が切り合った状態で検出された。 ${\bf SB\,01\,}$  (5.0 m×4.4 m) は、 ${\bf SB\,02\,}$  (3.8 m×3.0 m) に先行するが、時期的な差は顕著でない。両者とも不整形な長方形で、長辺の壁に竈が設けられている。 ${\bf SB\,02\,}$  の竈は、壁から突出した煙道部の残り具合がよかった。柱穴は、両者とも未確認である。



 $SB04\sim07$  は、規模および構造が類似している。形は、隅丸台形( $SB044.2\,\mathrm{m}\times3.3\,\mathrm{m}$ )、隅丸長方形( $SB053.5\,\mathrm{m}\times2.8\,\mathrm{m}$ , $SB064.5\,\mathrm{m}\times3.5\,\mathrm{m}$ )、方形( $SB074.3\,\mathrm{m}\times3.3\,\mathrm{m}$ )と、それぞれ異なっている(第3図)。しかし、いずれも長辺の中央に竈が設けられ、突出した煙道もよく形をとどめている。床面からのたち上り(深さ)も、約25 cm とほぼ

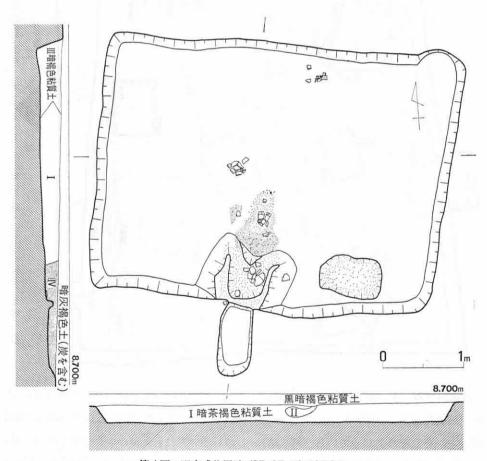
共通している。柱穴はいずれも認められない。

**SB 08・09** のうち、SB 09 (5.5 m×5.0 m) はほぼ正方形を呈し、全体を通じて大形である。北壁中央部に竈があるが、煙道部の残存状態は悪く明確でない。たち上りは約 20 cm を測る。柱穴は未確認である。竈に近接して耳環(金環)が出土した。住居跡から耳環が出土した例は、周辺では城陽市正道遺跡が知られており、興味深いものと言える。

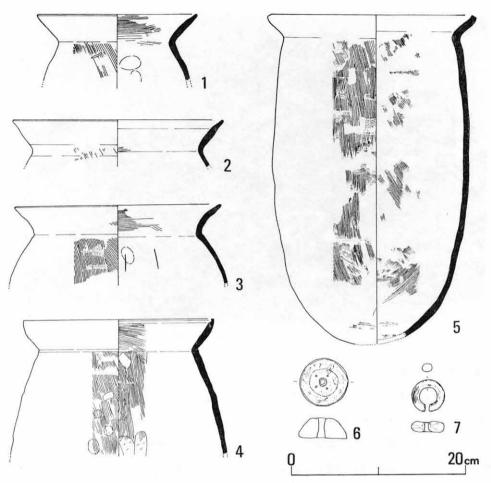
**SB10·11** は、ほぼ正方形で、竈が設けられていない。さらに、SB11 は、南半部の床面がベッド状に盛り上っていることなど、他の住居跡と明らかに異なった構造をしている。

遺物は、代表的なものとして SB 07 から出土した土師器甕があげられる (第5図)。口縁部は、緩やかに外反し、端部はまるく収めるものと、鉤状のものとがある。口縁部および胴部(上半)の内外面を刷毛で調整し、球形に近いものが多い。そのほかに、土師器鉢・甑、量的には少ないが須恵器高杯・壺等がほぼすべての住居跡から出土している。

土城 (SK) は、SK 09 を例外として比較的浅い。埋め土は、暗茶褐色粘土が主である



第4図 竪穴式住居跡 (SB 07) 平面実測図



第5図 出 土 遺 物 実 測 図

 $1\sim$ 4. 土師器甕 (SB07 出土) 5. 土師器甕 (SK11 出土) 6. 滑石製紡錘車 (SB04 出土) 7. 耳環 (SB09 出土) 6・7 は 1/3

が、SK 11 のように焼土のつまったものもある。時期は、竪穴式住居跡とほぼ同時期と推定される。

**堀立柱建物跡** (SB 12), **棚列** (SA 01), **満状遺構**については未整理な点も多く, ここでは 触れられない。

土器溜り (SX 01・02) は、竪穴式住居跡の遺構面を約 15 cm 掘り下げたところで検出した(第6図)。庄内式土器に併行する遺物を若干含むが、大部分のものは、布留式土器併行期のものである。器種は、甕・壺・高杯・小形丸底壺・鉢・器台等が存在する。甕・壺・高杯は、多様な形態を持ち、地方色が色濃く反映していると言える。胎土・形態・製作技法の違いからみて、近江系・河内系・大和系?・山陰系のものが含まれていることは容易に了解されよう。今後の整理作業の中心課題として、観察を積み重ねていきたい。



第6図 土 器 溜 り (SX 01) (西から)

#### 4. まとめ

今回の調査で得られたいくつかの知見や問題は、以下のとおりである。

- (1)竪穴式住居跡の形状・規模・構造が明らかになり、集落跡の性格の一端を窺えた。
- (2)竪穴式住居跡の竈の残りが良好であったため、同一形態の竈を持つ住居跡は、その関連性を考えられる。竈の向きや煙道の長さの差異は、それぞれが構築された季節差を反映しているのかもしれない。
- (3)土器溜り (SX 01・02) の遺物の多様さは、当時から木津川の水運を利用して、様々な集団が交流した証拠である。土器の器種の形態分類を正確に行い、個体数を算出し、さらに将来は、胎土分析を通して土器流通経路を統計的に明らかにする必要があろう。
- (4)自然地理学的に当地の古環境を復原し、遺跡の立地条件を検討する必要がある。

(黒坪一樹=当センター調査課調査員)

- 注1 長谷川 達「木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号 (財)京都府埋蔵文化財調 査研究センター) 1982.12
- 注 2 調査期間は 1 次・ 2 次を含め、昭和58年 5 月17日から同年 9 月24日までである。
- 注3 当初, SB 01・02 とともに、SB 03 の 3 基が切り合っていると考えたが、2 基だけであった ので、結局、住居跡の記号 SB 03 は欠番になってしまった。本稿では、あえて欠番のまま にしておいた。
- 注 4 高橋美久二·近藤義行「正道遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会) 1973

## 古代エジプト遺跡を訪ねて(6)

小山雅人

#### VII 末期王朝

新王国最後の王、ラメセス11世の治世、第19年収穫季4月16日(現行暦の紀元前1075年4月20日に相当)、カルナックのアメン・レーエ神殿の局長ウェナムーンは、神の船を造るための木材の買いつけに、レバノンのビュブロスへと出発した。当時、ラメセス11世という王はいたが、アメン・レーエ神殿の神官長フリホールが事実上の上エジプトの主であり、下エジプトはタニスに君臨するネスバネブジェデ(数年後に王を称し、第21王朝の祖となるスメンデース)の治下にあるという状態で、近隣諸国でのエジプトのかつての栄光と威信は地に落ちていた。ウェナムーンは、案の上、途中で盗難にあったり、ビュブロスでは、まともに相手にされず、さんざん嫌味を言われ、再度下エジプトのスメンデースに追加代金の金銀の壺や高級織物を送ってもらって、ようやくレバノン杉を切り出してもらうのである。そして、いざエジプトへ帰ろうとすると、途中でウェナムーンと一悶着を起した相手が船団を率いて追って来ていた。ウェナムーンは語る:

私は泣きくずれてしまった。[ビュブロスの]領主の書記官が出て来て、私に「どうかしましたか」と言ったので、私は彼に言った。「君には見えないか、あの渡り鳥がこれで二度もエジプトへ飛んで行くのが。あればね、涼しい沢へ渡って行くんだよ。一体いつまで、私はここに放っておかれるのだろう。それに、君には見えないか、私を投獄しようとまたやって来た連中が」彼は行って、領主にそのことを言った。領主は言われた話に涙を流した。痛ましかったのだ。

ウェナムーンは、ビュブロスを追われ、今度は嵐にあってアラシア(キプロス)に流れ着く。町の人々に追われながら、女王ハティバのもとへ庇護を求めに行って事情を説明するのであるが、ここでこの興味深い話を書いたパピルスは欠損して終っている。これは『ウェナムーンの航海記』とか『報告』と呼ばれているもので、最近はこれを公式の復命書と見る意見が支配的である。いずれにせよ、生き生きとした当時の口語体で書かれたこの文書は、随所に近代小説のような視覚的な描写を鏤めながらも、どちらかと言えば、冷たい文体で、斜陽のエジプトを具現するウェナムーンの苦難の旅を語っている。この自虐的なまでに描かれた紀元前2,000年紀末のエジプトの衰退は、そのまま続く数百年間のエジプトの運命でもある。ラメセス朝を最後の栄光として、ファラオのエジプトは、分裂・異

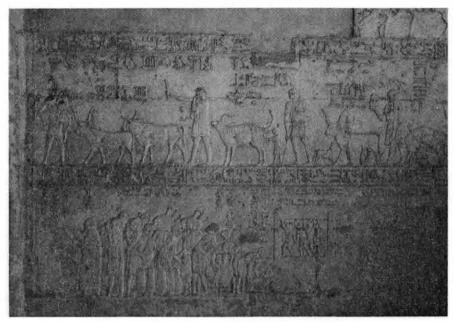


第1図 ナイルの夕陽 (東岸より西テーベを望む)

民族支配・反乱・再征服という惨めな歴史を歩んで行くことになるのである。第22~24王 朝はリビア系であり、第25王朝はヌビア人というように、かつてはエジプトが支配した民 族に支配されたのである。しかも、西アジアからは、センナケリブ・エサルハッドン・ア ッシュルバニパルの各王に率いられたアッシリアの遠征軍が、何度もパレスティナ・下エ ジプト、そして上エジプトのテーベまで侵略の手を伸ばして来た。まさに内憂外患の時代 であった。

その後、第26王朝(サイス朝)になると、アッシリアは滅び、メディア・リュディア・新バビロニアの3王国と共に、オリエントの4強国分立時代を迎え、束の間の平和と繁栄が訪れる。この時代、エジプトでは復古趣味が起り、特に古王国(当時から数えても2,000年前)の彫刻や浮彫をコピーしたような作品が多く作られた。これらの作品は、カイロ博物館等で多く見ることができるが、工人の技術の伝統が、少なくともこの時代までは、混乱の数世紀を経ても、なお連綿として受け継がれていたことを証明している。まさに白鳥の歌である。

サイス朝は、前525年ハカーマニシュ(アカイメネス)朝ペルシアのカンブジア(カンビュセス)二世のエジプト遠征によって滅び、ペルシア支配時代となる。そのペルシア帝国を倒したのがマケドニアのアレクサンドロス大王で、彼がエジプトへ来た前332年が、通例古代エジプト史の最終ページで、それより後はヘレニズム史やローマ史の一部として扱われている。



第2図 ペトゥシールの墓 壁面浮彫

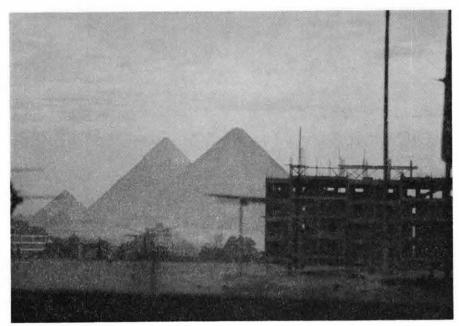
トゥナ・エル・ゲベルのペトゥシール (ペトシリス) の墓は、ペルシア支配時代の、トート神の神官とその家族の墓であるが、地下ではなく地上に神殿のような形に構築された。この墓の浮彫は、非常にエジプト的な題材を、ギリシア美術風に表現しており、周囲に刻まれた象形文字の方が反って異和感を感じさせる程である。

エジプトには多くの神殿が残っているが、その大半は、アレクサンドロスの跡を継いだプトレマイオス朝の遺産である。エジプト学徒とあれば、見ておかねばいけないのであろうが、筆者には全く興味がなく、事実今度の旅でも、1つも訪れていない。写真等で見る限り、浮彫や彫像の人物など、異様に印欧的で、まるでハリウッド映画の古代エジプトを見ているような気がするのである。

ラメセス朝以後の末期王朝の歴史は、概略上に記したようなことであるが、率直に言うと、実は避けて通りたかったのである。実際、この時代(古代エジプト文明をざっと3,000年と見れば、その後半の3分の1)の遺跡・遺構・遺物は、今回の旅行でほとんど見ていないし、また、見たいと思うほどの興味もなかった。

#### VIII おわりに

普通「古代エジプト」とか「王朝時代」あるいは「ファラオニック・エジプト」というのは、日本史で言えば縄文時代中期始めから晩期に相当するざっと3,000年間である。アレ



第3図 建設中の団地と三大ピラミッド

クサンドロス大王の征服以後、プトレマイオス朝・ローマ帝国に支配された時期が、日本では弥生時代と古墳時代にあたる。そして、日本の飛鳥時代にエジプトはウマイヤ朝による征服でイスラーム化し、諸王朝の盛衰を経て現代に至っている。つまり、ちょうど日本が仏教国であったのと同じ期間、エジプトは回教国であったわけである。従って、古代王朝時代のエジプトは、われわれにとっての縄文時代のように、はるか彼方の存在であるはずであり、実際、エジプトの都市や村は、アラビアン・ナイトの世界の延長である。ところが、この国は、遺跡・遺構・遺物の保存状態がおそろしく良く、また文献史料も豊かで、ファラオの時代の姿が、日本史で言えば、飛鳥・奈良時代程度まで解明されているのである。われわれの使っている紙幣に聖徳太子像が印刷されているように、エジプトのお札には、4,000年も5,000年も前の国王の姿が見られるのも象徴的である。

1822年のシャンポリオンのエジプト文字解読以後、A. エルマンや A. H. ガーディナー等による文献学の発達、「考古学の父」W. F. ペトリーや各国の研究機関等の発掘調査による考古学の進歩によって、エジプト学は歴史学の中でも極めて恵まれたフィールドとして発展して来た。エジプト文献学と日本考古学という二足の草鞋を履く筆者であるが、今回の研修旅行で遺跡をまのあたりに見て、今後は、文献・考古という歴史学の両輪が理想的に回転してきたエジプト古代学の成果を、日本での埋蔵文化財の調査に生かして行きたいと思う。 (小山雅人=当センター調査課調査員)

#### 昭和58年度発掘調査略報

## 4. 中 山 城 跡

所 在 地 舞鶴市字中山一ノ丸1-1・12・13

調査期間 昭和57年12月8日~昭和58年3月31日(第1次)

昭和58年6月20日~9月22日(第2次)

調査面積 約 1,000 m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、府道西神崎上東線の道路改良工事に伴うものであり、冬期と夏期の二時期にわたって発掘調査を実施した。

中山城跡は、室町時代~江戸時代初頭にかけての山城跡で、若狭湾にそそぐ由良川の河口から約 5 km 程さかのぽった右岸丘陵上(標高約 65 m)に位置する。城跡は、南北に長い丘陵の稜線上を利用して、曲輪・空堀・土塁を連郭式に配置している。中山城跡の東南約 2 km の建部山山頂(標高約 316 m)には、丹後守護一色氏の居城・建部山城が存在する。建部山城と中山城は、本城と支城の関係にあったとみられる。

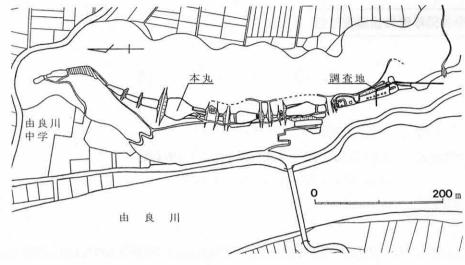
調査地は、中山城跡の最南端部で、搦手にあたり、城跡関連遺構の検出が期待された。



第1図 中 山 城 跡 位 置 図 1. 中山城跡 2. 建部山城跡 3. 福井城跡 4. 田辺 山城跡 5. 城屋城跡 6. 高野由里城跡 7. 引土城跡

調査概要 まず、地形の状況から調査地を3地区に分割し、北から順にA地区(北部テラス)、B地区(中央部傾斜地)、C地区(南部テラス)とした。調査前の段階では、A地区に方形のマウンドを持つ古墓が6基、南北方向に連続して存在していた。今回の調査では、6基の古墓のうち、南側の3基が調査の対象となった。

調査の結果, B地区の曲輪部で 火葬墓4基(埋葬主体部5か所), C地区でも火葬墓1基を検出した。 城跡に関連する遺構としては,

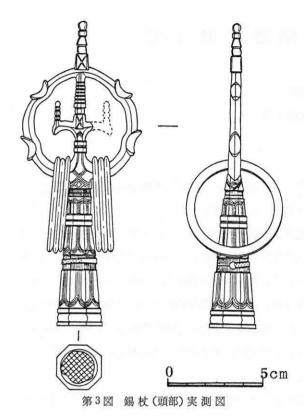


第2図 中山城跡概略図

B·C両地区の境界部で、堀切り状の地山掘削部を検出したにすぎなかった。

A地区の3基の古墓は、各々一辺約2.2m程度の方形を呈し、マウンド高も最もよく残っているもので約60cmの高さであった。埋葬主体部は一辺約1.2~1.4mの方形で、地山面を約60~80cm程度掘り込んでいた。墓の周囲には幅約50cm程度の浅い溝をめぐらしている。各墓広内からは土葬人骨のほか、寛永通宝(新)6枚が各々出土し、その他に錫杖の頭部と繋が各一点出土した。これらの土葬墓の年代は江戸時代中期以降とみられる。

- B・C両地区の古墓は、調査前の段階では確認されておらず、表土層を取り去った段階で検出された。B地区では、北から南にかけて下る曲輪部(幅約2m)の南半分を新たに削り、傾斜を緩く整えた後に墓を造っている。墓には人頭大から拳大の石を方形及び円形に配したものや、大型の石を1個しか配さないものもみられる。墓址の深さは、20cm 前後と浅く、火葬人骨・灰・炭等を埋土中に含んでいた。出土遺物は少なく、集石中に茶臼片、五輪塔片(火輪)が認められた。C地区からは、火葬墓1基が検出された。B地区の火葬墓に存在した石等はみられず、墓址内には、焼土・灰・炭が多量に含まれていた。また、少量の火葬骨も出土している。
- B・C両地区で検出した火葬墓は、遺構に伴う遺物がほとんど存在していない。B地区の火葬墓は、曲輪部を新たに削平して造っていることから、城としての機能が終了してから造られた墓と考えられよう。
- まとめ 当初,予想された中山城跡に関する遺構・遺物は,残念ながら,今回はほとんど検出できなかった。調査地以北には,郭・空堀・土塁等が連続し,各々の郭部に中山



城の中心的な遺構が存在するものと みられる。

今回の調査で検出された近世の墓のうち、A地区の土葬墓内から錫杖の頭部・磬などの仏具が出土している。このような遺物の出土から考えて、連続する6基の古墓は、修験者の墓の可能性が高い。火葬墓の被葬者については、不明な点が多い。土葬墓と火葬墓にみえる2通りの形態差は、時期差あるいる被葬者間の身分的な差によるのか、いずれとも考えられるが、詳しいことは不明である。

今後、中山城跡を考える上で、周 辺地域における山岳宗教やその寺院 などとの関連を含め、検討を必要と する問題を数多く残している。

(竹原 一彦)

注 建武3 (1336) 年,足利将軍家一門の一色氏は、丹後の守護に任ぜられ、建部山城を居城として、丹後85城の山城を治めたとされる。中山城もこのうちの1城とみられる。建部山城最後の城主の一色義道は、天正7 (1579) 年の明智光秀・細川藤孝両軍の丹波・丹後征討によって、中山城にてその最後を遂げている。一色氏滅亡後、丹後を治めた細川氏は、慶長5 (1600) 年の関ケ原合戦の功により、九州小倉39万石に転封され、中山城等の山城の多くは廃城となった。

## 5. 千代川遺跡第4次

調査期間 昭和58年6月20日~10月15日

調査面積 約 1,900 m²

調査概要 今回の調査は、亀岡市大井町小金岐において、京都府立丹波養護学校亀岡分 校の校舎新築が計画されたため、事前調査として実施した。

調査対象地は、遺跡分布調査及び近年の発掘調査等によって、弥生時代から平安時代に 至る各時代の遺構・遺物が確認された千代川遺跡の南端の一画であることが知られている。

当遺跡に最も近接している調査地に、昭和57・58年度当調査研究センターが実施した千代川第3次調査がある。この調査地からは、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基とそれに伴う同時代の大溝(幅約10m・深さ約2m)や土拡、また、弥生時代から平安時代の溝等の重要な遺構が確認されている。そのため、当初は、本調査地でもそれらに関連する遺構が検出されるのではないかと期待された。

本調査では千代川第3次調査に直接関連する遺構は確認できなかったが、奈良時代の掘立柱建物跡(2間×2間)1棟と同時代の溝、平安から鎌倉時代の素掘溝を多数確認した。

調査は、校舎建設予定地を中心に 3 m 方眼の地区を設定し、南北を数字、東西をアルファベットで表わす地区名をつけた。次に、調査地内に 3 m 幅のトレンチを数本設定し、

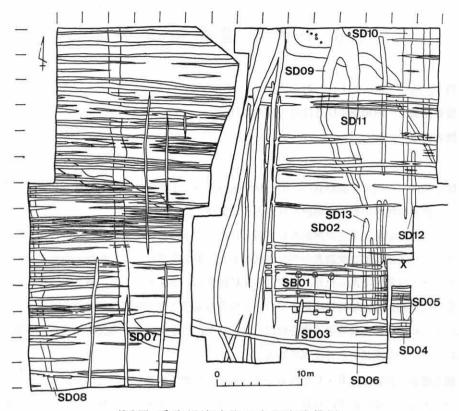


第1図 調査地位置図 (1/25,000)

試掘を行った。その結果、黄褐色粘 土の地山上に黒色土の堆積があり、 その上層で弥生時代から鎌倉時代の 遺物包含層を確認した。

遺構は、黒色土層の上層から切り 込んでいると考えられる奈良時代の 掘立柱建物跡と溝状遺構を地山面で 検出した。また、黒色土層を切り込 んだ中世素掘溝を多数検出したので トレンチを拡張した。

まとめ 今回の調査では、奈良時代から鎌倉時代を中心とした遺構



第2図 千代川遺跡第4次調査遺構図

#### ・遺物を多数検出した。

出土遺物は、縄文時代の磨製石錘、弥生時代の打製石鏃・石包丁等と弥生式土器、また、 土師器・須恵器・緑釉陶器・青白磁・瓦器等がある。

遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡 (2間×2間総柱倉庫) SB 01 とそれを囲む溝 SD 02・03・04・06・13、また、水田の水路と考えられる溝 SD 07・08 がある。

鎌倉時代の遺構としては、東西方向の多数の中世素掘溝がある。前者の奈良時代の溝群は南北方向に走るものが主流だが、鎌倉時代の溝は東西方向に走るのが主流である。これらの事から、奈良時代には南北方向の縦長に利用されたものが、鎌倉時代には東西方向の横長に利用されたことが判明する。なお、これらの溝は、亀岡盆地の地表面に残る条里制地割と同一方向にあることから、奈良時代に条里制の起源が求められるとすれば、重要な遺構である。また、倉庫とみられる掘立柱建物跡1棟しか今回は確認できなかったが、それに伴う建物が調査地周辺に予想されるので、今後の調査に期待がもたれる。

(村尾 政人)

## 6. 千代川遺跡第5次

所 在 地 亀岡市千代川町北ノ庄

調査期間 昭和58年10月11日~11月30日

調査面積 320 m<sup>2</sup>

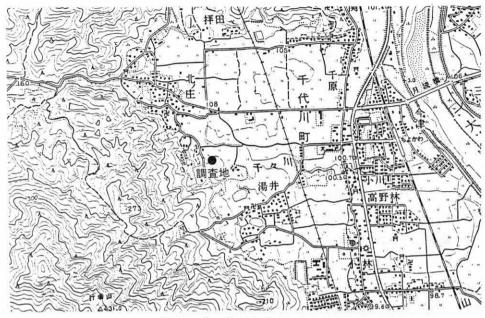
はじめに 今回の発掘調査は、国道9号線バイパス工事に伴う事前調査として、当該地域に遺構・遺物等の有無の確認を目的として実施した。

調査地は、昭和56年度発掘調査を実施した千代川遺跡第2次調査地北側の舌状丘陵先端である。地区割は第2次調査の割付を利用した。第2次調査では、丘陵の中央部と南側の一部のA・B地区であったが、今回はB・C地区の一部を掘削した。第2次調査の結果、弥生時代後期から古墳時代中期までの住居跡等の遺構と古墳時代後期末から奈良・平安時代の掘立柱建物跡・溝等の遺構を検出した。また、出土遺物は、縄文時代後期から鎌倉時代にかけての長期にわたる土器等が出土した。

調査概要 調査は、B・C地区の丘陵先端の三角形舌状地(約200 m²)を調査対象として全面掘削した。その結果、丘陵の先端近くはほとんどが中・近世の盛土であることが判明した。この丘陵は、元来、現在より約5~8 m 短く、後世の水田化に伴い、丘陵を水平に削平した時点で、削平部の土砂を丘陵先端に削り出したものと考えられる。地山面は丘陵の南西からゆるやかに傾斜しているものの、埋土(丘陵先端から約8 m 南西)近くでは急な崖になっていた。埋土は、黄褐色砂質土層で、旧崖面には黒色土層のブロックを多く含んでおり、弥生時代から中世に至る遺物が出土した。

調査の結果、検出した遺構は、弥生時代末~古墳時代後期の竪穴式住居跡3基・溝・土 拡・ピット等と、奈良時代~中世の掘立柱建物跡・溝・土拡・ピット等である。竪穴式住 居跡は3基あり、庄内併行期から布留式併行期と考えられる。規模は、3基とも、一辺4.5~7mを測り、方形を呈している。住居跡内の柱穴は、約10~20個を数えるが、主柱と考えられる対角線上に4個ある形式的なものは少ない。また、周溝で全周するものはない。 貯蔵穴は、北壁の中央に長方形の二段掘り、西壁南側に隅丸長方形で同規模のものを持つタイプと、北壁中央と北壁西側に長方形のものを持つものと、2基の住居跡がある。

出土遺物は、弥生時代末から古墳時代前期にかけてのものが最も多く出土している。遺 構に伴う遺物としては、竪穴式住居跡から出土した石器・管玉・布留式土器・須恵器等が ある。また、溝からは庄内併行期と考えられる鉢と受口状口縁を呈する甕がほぼ完形で出



調 查 地 位 置 図 (1/25,000)

土した。

まとめ 当調査は、昭和56年度の千代川遺跡第2次調査と合わせた成果により、千代 川町の西側段丘上における弥生時代末から古墳時代にかけての歴史的変遷を知る上で、貴 重な資料を得たといえる。また、奈良時代から中世に至る間では、この地域が丹波国府推 定地に近接するため、国府周辺における官衙付随施設が存在した可能性がある。そのため、 今回の調査によって得られた成果は、丹波国府を眼下に一望していた当地方の人々の社会 や文化を解明する上で、貴重な資料をもたらしたと言えよう。

特に、今回の調査においては、弥生時代末から古墳時代後期にかけての竪穴式住居跡3 基と、弥生時代末の溝状遺構や、奈良時代から中世にかけての掘立柱建物跡・土拡・溝等が確認され、集落の様相が次第に明らかになってきている。また、床面から古式に類する 須恵器片と製塩土器、布留式甕が出土した住居跡は、綾部市及び由良川水系によくみられ る青野型と類似しており、同様のものと考えれば、亀岡盆地において新たな重要資料の追加となろう。 (村尾 政人)

## 7. 上 中 遺 跡

所 在 地 北桑田郡京北町大字上弓削小字沢ノ奥15

調査期間 昭和58年7月18日~9月9日

調査面積 約 300 m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、京都府立北桑田高等学校の格技場新築工事に先だち行ったものである。調査地周辺からは、弥生時代前期及び後期の土器片や半磨製石槍などの出土が知られており、さらに弓削川左岸には、1861(文久元)年下弓削出土と伝える銅鐸(扁平鈕式袈裟襷文銅鐸)があることから、集落の存在が期待された。

調査概要 調査は、15 m×20 m のトレンチを設定し掘削を行った。基本的な土層は、 現地表面より 0.3~1.2 m の厚さで、①盛土、②旧耕作土、③暗褐色土、④黒褐色土、⑤ 黄褐色礫混じり粘土の地山へと続く。旧地形は北から南へと傾斜している。②・③層は弥 生時代末期~現代の遺物を含んでおり、④層から遺構面となる。

調査の結果,トレンチ東側部分においては柱穴状の掘込み 2 か所(径 0.6 m・深さ 0.2 m),土拡 (1.9 m×2.4 m・深さ 0.4 m)を,トレンチ西側では川跡(幅 6 m・深さ 1.1 m)を検出した。これらの遺構は弥生時代末期~古墳時代前期に比定されるものである。

遺物は弥生時代末期~鎌倉時代に至るまでのものが出土したが、前述した遺構以外から 出土した遺物としては、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の須恵器・土師器片、鎌倉時 代の片口鉢片・瓦器椀片等も出土している。また、土師製の土錘1、滑石製の紡錘車1、 縄文時代に比定されるチャート製石鏃及びチャート剝片等も若干出土した。川跡内からは



器(板材・杭)も出土している。 まとめ 調査地が台地の南端部分に

少量であるが、わずかに加工痕の残る木

まとめ 調査地が台地の南端部分に 位置していたため、集落の存在は確認されなかったものの、生活の場となっていたのは、北東側の現校舎部分の可能性が考えられる。これまで当地方においては、古墳時代以前の資料が少なく、今回の調査により得られた資料は、歴史的空白部分を埋めるものであり、今後、資料の増加に期待したい。 (増田 孝彦)

## 8. 長岡宮跡第 134 次 (7AN15E-8地区)

所 在 地 向日市上植野町南開15-1

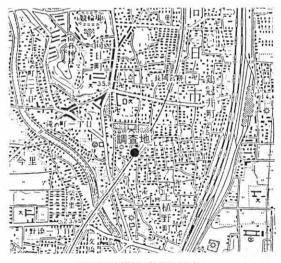
調査期間 昭和58年6月6日~6月20日

調査面積 約 82 m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、向日町警察署上植野派出所建設に先だって行われた。調査地は、阪急電鉄京都線「西向日」駅構内にあり、向日丘陵から南東にのびる段丘の縁辺部に位置し、標高約29mを測る。ことは長岡宮跡内でも朝堂院南方部にあたり、これまでの調査によって同時期の建物跡が発見されている。また、遺跡立地によい地形なので、長岡京期以前から長く利用されており、弥生~奈良時代にわたる遺構・遺物も検出されている。

調査概要 調査は、敷地内の樹木の伐採・移植からはじめ、表土は重機によって掘削し、 地表下約 40 cm からは人力で掘り下げた。現代の盛土以下に暗茶褐色土が薄く堆積し、 調査地北側ではその下に炭粒の混入した灰褐色土が広がっていた。それぞれ比較的固くし まり一時期の地表であったと考えられるが、そこに包含される遺物からみて、ともに近・ 現代に形成されたと考えられる。最終的に、地山面まで精査した結果、近・現代の攪乱拡 ・溝・動物の墓を検出したにとどまり、その他の時代の遺構は存在しなかった。遺物は少 量・細片であるが、瓦・陶磁器・土師器・須恵器・古銭(寛永通宝)などが出土した。

なお、調査地内における地山の様相は、狭い範囲であるにもかかわらず、南側は砂礫層、



調査地位置図 (1/50,000)

北西側は粘土層、北東側は砂層というように、種々の変化を見せていた。

調査の結果、この場所には古い 遺構面は存在せず、旧耕作土層も なく、地山に接して近・現代の層 が堆積していることから、阪急電 鉄を施設する時、あるいはその頃 の宅地造成の際、ある程度、削平 を受けたものと考えられる。

(長谷川 達)

## 9. 長岡宮跡第 140次 (7AN15 I地区)

所在地 向日市上植野町御塔道7-5

調査期間 昭和58年10月11日~11月13日

約 160 m<sup>2</sup> 調査面積

はじめに 今回の調査は、(仮)向日市立西向日コミュニティーセンター建設に伴う事前 調査である。調査地は、長岡京跡条坊復元図では二条第二小路中心線延長上に位置する。 また、長岡宮跡官衙配置図によれば、朝堂院西方官衙域にあたる。調査地周辺では長岡京 跡第71次・第97次調査で建物跡が検出されているが、調査地南東側で行われた長岡宮跡第 134次調査では、長岡京期の遺構は全く検出されていない。

調査概要 調査は、過去に行われた周辺の調査成果を参考にし、対象地に 10 m×16 m のトレンチを設定し、掘削を開始した。その結果、表土下 0.64 m のトレンチ中央部で、 幅3m・深さ0.5mを測る東西方向の溝を検出した。しかし、溝は、東側の土拡や近代の 削平によって東西 6.5m を検出するにとどまった。溝の南側には瓦類が溝の傾斜に沿って 落ち込んだ状態で堆積していた。瓦類は、溝壁には密着せず、溝が若干埋まってから落ち 込んでいるのが観察できた。溝の南側は北側よりやや高く, 黄褐色土, 赤褐色・白色系粘土 の混在する整地層状の土層が東西に延び、断面で見ると薄い層状を形成していた。これら のことから、当初、溝と南側の状況から築地及びその側溝ということが考えられたが、さら に南側にトレンチを拡張した結果,南側には溝はなく,築地と確定することはできなかった。

出土遺物は、溝内から平瓦・丸瓦・軒平瓦片1・ふいご羽口1が出土した。土拡内から



調査地位置図(1/50,000)

は,長岡京期の須恵器・軒平瓦片1点, 約30cm四方の凝灰岩1,また,特筆すべ きことに, 鴟尾片数点が出土した。

調査によって, 朝堂院西方官衙にかな り大きな溝等で区画された官衙の存在が 明らかとなり、鴟尾片の出土でかなり重 要な建物の存在が考えられるが、今後の 資料の増加を期待しつつ検討していかな ければならない問題を多く残している。

(増田 孝彦)

## 10. 長岡京跡左京第 103 次 (7ANMYD地区)

所 在 地 長岡京市神足柳田

調查期間 昭和58年8月3日~8月19日

調査面積 約 160 m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、国道171号線の歩道設置工事に先だって行った発掘調査である。 調査地は、長岡京跡左京六条一坊付近と推定されるだけでなく、弥生時代の集落跡雲の宮 遺跡の一画にあたると考えられる地点でもあった。調査は、畑地・水田に接する部分につ いてのみ行った。対象地は、工事の性格上、道路に沿って南北に細長いものとなり、幅は 上面で約2m、底面ではそれをはるかに下回ることになった。

調査概要 道路関係の盛土及び旧耕作土を重機によって除去し、その後、人力によって 掘削した。トレンチは、北側から8本入れたが、道路脇に設置されている電柱・標識・電 話地下ケーブル等が障害となり、各トレンチの長さは不規則なものとなった。

8本のトレンチの中で遺構を検出したのは、最も北側のものだけである。トレンチを北北西から南南東へ横切る形で溝を一条確認した。幅約 $1.1\,\mathrm{m}$ ・深さ約 $30\,\mathrm{cm}$ を測るものであるが、検出した長さは約 $1\,\mathrm{m}$ で、その性格は不明である。埋土内から古墳時代の土師器の甕・壺・高杯が出土している。

トレンチで観察できる基本的な土層は、道路(国道171号線)面から約1.1mの盛土が



調査地位置図(1/50,000)

あり、それ以下に旧耕作土・床土・ 青灰色粘質土があり、それから灰色 砂質土・灰色砂層等が堆積し、植物 遺体等を含む黒灰色粘質土が続く。 遺物は、主に青灰色粘質土上部から 出土したもので、土師器・須恵器・ 瓦器・磁器等があり、時代的には古 墳・平安・鎌倉時代等にわたるが、 小片が多く、まとまった出土はして いない。

(長谷川 達)

## 11. 長岡京跡右京第 127 次 (7ANOSZ·STE地区)

調查期間 昭和58年3月4日~3月31日,同年4月4日~8月23日

調査面積 約 3,800 m<sup>2</sup>

調査概要 この調査は、長岡京市と大山崎町の丘陵地に府立高校の建設が計画されたため、工事に先立って実施したものである。

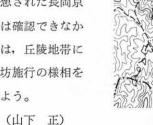
調査地は、西山山麓から東に向って派生する小丘陵上にあり、調査前は一面竹藪であった。今回は、調査地の一画が推定長岡京域の南西部にあたり、京内の西辺を画する西四坊大路が想定される位置にある。調査地の北方の低位段丘上には、旧石器・縄文時代の遺跡である下海印寺遺跡があり、丘陵側に目を転じれば、4世紀末頃の前方後円墳である鳥居前古墳や後期古墳の西明寺古墳等が分布する。また、平安時代の蔵骨器も調査地に近接した丘陵で発見されている。

調査は、丘陵の尾根筋や谷部に計22本のトレンチを設定して行った。調査地は、竹藪の 土取り・土入れによる土地の改変が著しく、各トレンチとも顕著な遺構は、ほとんど検出 することができず、遺物も客土中から数点の石器・土師器・須恵器・陶器などの破片を採 取したにとどまった。

ここでは、A-21 トレンチで検出した石溜り (SX 01・SX 02) について記す。これらは、

ともに丘陵の斜面を穿ち、人頭大ほどの自然石を乱雑に積んだもので、掘形は、隅丸の長方形を呈し、それぞれ 1.3m×0.9m, 1.4m×0.8m で、深さは 0.3m を測る。伴出した遺物もなく、その時期・性格に関しては明確ではない。あるいは、墓等の施設が考えられるかもしれない。

今回の調査では、当初予想された長岡京 の条坊に関わる遺構や遺物は確認できなか ったが、今回得られた成果は、丘陵地帯に 位置する長岡京の西辺の条坊施行の様相を 伝える一資料を得たと言えよう。





調査地位置図 (1/50,000)

## 12. 長岡京跡右京第 141 次 (7ANIST-5地区)

長岡京市今里3丁目 所在地

昭和58年8月11日~10月24日 調査期間

約 210 m<sup>2</sup> 調査面積

調査概要 この調査は、長岡京市今里地区における都市計画街路(外環状線)の改良工 事に伴うものである。

調査地は、小畑川西岸の氾濫原とそれ以西の河岸段丘との地形変換点付近に位置する。 当工事に伴う従来からの調査によって、周辺には長岡京の条坊遺構、5世紀前半の前方後 円墳(今里車塚古墳),弥生時代から古墳時代の集落跡などが発見されている。今回の調査 地は、長岡京の推定西二坊大路にあたるだけでなく、今里車塚古墳に南接した位置にある ため、それらに関わる遺構の検出を主目的とした。

調査の結果,長岡京期のものと思われる南北溝(溝3),中世の溝・石溜り等の遺構を検 出した。以下,主要な遺構の概略を記す。

溝3は、幅1.2~1.5 m・深さ0.1~0.2 mで、北側では若干東に振れるが、南北に走っ ている。溝からは、須恵器・土師器の細片とともに、平城宮6721系の軒平瓦が出土した。 溝3は、西二坊大路西側溝の推定線から東へ5~6m ほどずれた位置にある。

石溜りは、2~3 cm の河原石を主体としたもので、調査地の南側をのぞき、全体に広が っており、溝3への混入も認められた。石溜りは、瓦器を含む溝によって切られているの で, その溝以前のものであることは明白である。

今回の調査では、当初、予想された今里車塚古墳に関わる遺構を検出することはできな かったが、溝3は、長岡京の西二坊大路の西側溝にあたる可能性がある。ただ、右京第7



調査地位置図 (1/50,000)

次・12次・26次の各調査で検出された西 二坊大路の両側溝の位置から考えると, 今回検出した溝3が推定線から東へずれ るため,必ずしも,溝3を西側溝とは断 定しない方がよかろう。

(山下 正)

注 溝3の国土座標は,Y=-27905.5である。

#### 府下遺跡紹介

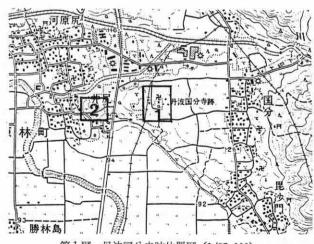
## 16. 丹波 国 分 寺 跡

丹波国分寺跡(国分僧寺)は、亀岡市千歳町国分にあって、現在も浄土宗寺院としてその名を伝えている。国分寺は、天平9 (737)年から造営が始まり、同13(741)年3月に国分二寺建立詔が出されていら造営事業は本格化した。このときの詔文によると、国分寺には七重塔一区を設け、その中に金字の金光明最勝王経を置いたとある。また、僧寺に封50戸・水田10町、尼寺に水田10町を与えて財政的基盤としている。当時の構想では僧寺に20人、尼寺に10人の僧尼を住まわせて、運営に当らせる予定であった。

このような方針で造営が進められただけでなく、東大寺が総国分僧寺となっている関係もあって、伽藍配置(寺院の主要堂宇の配置)は東大寺式を基本にしたものとなった(国分寺式一第2図)。むろん、例外もあり、美濃国分寺は、法起寺式の配置をとっている。このように、必ずしもその造営が画一的でなかったことが、発掘調査によって明らかになり始めたのである。

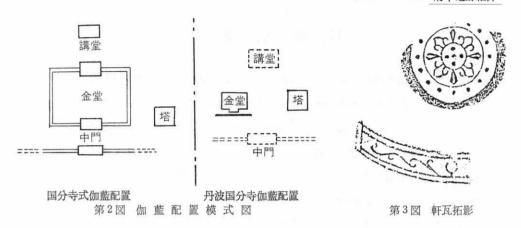
当国分寺も、各地の国分寺と同様な経過で造営された。延喜・主税式には、丹波国分寺料として40,000束の正税(地方財政の財源で、公民の納める租からなっている)が充てられており、地方財政に占める国分寺経営の大きさが知られよう。当寺からは平安時代の瓦も見つかるなど、平安時代になっても造営が行われるほどの大寺院であったと思われる。

中世の様子は全く知ることができない。ただ、寺伝によると、戦国時代の終わりの天正



第1図 丹波国分寺跡位置図 (1/25,000) 1. 丹波国分寺跡(僧寺) 2. 御上人林廃寺(尼寺)

年間(1573~92)に、明智光 秀が丹波亀山城を築くとき に焼失してしまったらしい。 このように、国分寺は年月 とともに衰微してしまった が、江戸時代に入ると、堂 宇が一部再興されるように なった。元禄14(1701)年11 月の銘の入った鍔口が残る だけでなく、現存する本堂 は、宝暦年間(1751~64年)



に護勇比丘という人物が再建したとする伝えもある。なお、当国分寺には、本尊として薬師如来像が伝わっており、平安時代の終り頃の作とみられるが、どのような経路で当国分寺に入ったのかまったくわかっていない。

当国分寺には塔跡の西側に土壇があるので、古くから東西二塔を持つのではないかと推定されていた。昭和57年度から始まった発掘調査は、「西塔」と呼ばれていた所を中心に行われたため、従来の考えを改めなければならなくなった。調査の結果、基壇の規模は、東西19.6 m・南北15.4 mで、この上に五間四面の建物のたつことがわかった。建物の規模は、東西梁行15.8 m・南北奥行11.6 mであって、塔でないことがはっきりした。すなわち、西側基壇にたつ建物は金堂であり、丹波国分寺跡は、法起寺式に近い伽藍配置を持つ寺院であった。また、基壇自体も、創建時の瓦積基壇と再建時の乱石積基壇の二時期があり、建てかえのあったことも知られるようになった。

遺物については、平安時代後期から鎌倉時代の土師器が大部分を占めている。これらは、 乱石積基壇の金堂に伴うもので、金堂の建てかえがその頃行われたことを示している。瓦 もかなり見つかっていて、第3図の忍冬文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦が全軒瓦の6割を占 めた。軒平瓦については、第3図と同じ文様のものが御上人林廃寺(国分尼寺)から出土 しており、僧寺と尼寺の造営が同時並行で行われたと言えよう。

以上のように、当国分寺の調査は始まったばかりだが、伽藍配置がほぼわかり、金堂も 二度の建てかえのあったことなど、大きな成果をあげている。だが、全体の規模・寺域の 確認など、今後の成果にまつべき点も多い。国分尼寺については、6次にわたる発掘調査 で伽藍配置等が明らかになっている。 (土橋 誠)

#### 参考文献

角田文衛編『国分寺の研究』下 1938 『史跡丹波国分寺跡第1次発掘調査報告書』亀岡市教育委員会 1983 井上 薫『奈良朝仏教史の研究』 1966

## 17. 樫 原 廃 寺

樫原廃寺は、京都市西京区樫原内垣外町にあって、京都盆地の西南部に位置している。 この付近には百々池古墳・天皇の杜古墳・一本松塚古墳などがあって、比較的はやく開発 された地である。この辺は、古代の「葛野郡」の南部にあたっていて、葛野郡が山背秦氏 によって開発されたとすれば、当廃寺も秦氏と何か関係があったのかもしれない。

当廃寺は、古瓦が散布することで、古くから一部の人には知られていた。本格的な調査は、昭和42年になって行われた。この時の調査で、注目すべき成果が得られた。

塔跡は、第2図にあるように、一辺  $5.07\,\mathrm{m}$ ・対辺の距離  $12.27\,\mathrm{m}$  の規模を持つ八角形 の瓦積基壇を有していた。はじめは八角円堂かと思われたが、中央部から心礎が見つかったので塔跡と判明した。 この基壇にたつ建物の規模は、側通柱間約  $2.2\,\mathrm{m}$ ・四天柱間約  $2.2\,\mathrm{m}$  と推定されている。まさに、夢殿を想い起こさせるような塔であったと思われる。この塔の心礎は、いわゆる地下式心礎と呼ばれているもので、基壇中央部の現在の上面から  $2.05\,\mathrm{m}$  下から見つかった。心礎自体は、花崗岩でできており、方形(東西径  $1.98\,\mathrm{m}$ ・厚さ  $1.05\,\mathrm{m}$ )で、各辺をあらく面取りしている。心柱を受ける部分には円形の凹み(直径  $84\,\mathrm{cm}$ ・深さ  $9\,\mathrm{cm}$ )があり、心礎の形態としては古い方に属している。

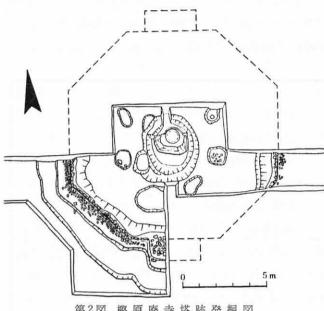
中門は、基壇の規模が東西約 20 m・南北約 11 m あって、残り具合が悪かったので瓦積 基墳を持っていたかどうか確認されなかった。この中門から東西に回廊がのびており、



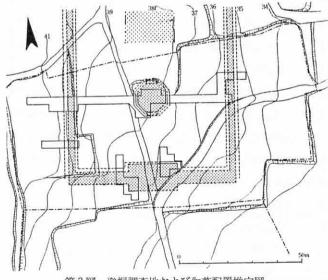
第1図 樫原廃寺位置図 (1/25,000)

その北側には雨落ち溝も存在 した。普通の大寺院の例など では、回廊は、そのまま塔を 中央に囲んで金堂にとりつい たり、金堂も含めて囲むよう に講堂にとりついている。し かし、樫原廃寺では、東西が 築地屏になっていて、回廊そ のものは南側だけしか確認で きなかったのである。この点 が他の寺院と大きくちがう点 で、珍しい例といえる。この 築地屏の東西には、それぞれ 南北方向の雨落ち溝があり、 西側の築地に伴う西側溝からは,多くの礫とともに多量の瓦が出土した。

金堂・講堂については、発掘調査がなされなかったので、詳しいことはわからないが、 塔跡の北側には土壇状の盛り上がりがあり、これが金堂跡の基壇ではないかと推定されて いる。推定金堂跡の北側は、地形的にみて一段落ちているため、講堂があったかどうか現



第2図 樫原廃寺塔跡発掘図(『埋蔵文化財発掘調査概報』1967より)



第3図 発掘調査地および伽藍配置推定図 (『埋蔵文化財発掘調査概報』1967より)

在では確かめようがない。 あるいは、当初から金堂・ 講堂と別々の建物になって いたかもわからない。

以上のような堂宇の配置 が考えられるが, これは, 四天王寺式伽藍配置ときわ めて近い形態といえる。ま た, 出土遺物は, 古瓦・土 師器・須恵器・瓦器・塼・ 鉄器・青銅器など多種多様 にわたっている。 このうち, 古瓦では,白鳳期(7世紀 後半~8世紀初頭) にまで さかのぼりうるものがある。 この寺院が四天王寺式伽藍 配置に近い形態をとること とあわせて考えると, 当廃 寺の創建が白鳳期になるこ とは, ほぼまちがいなかろ う。また,山陰道沿に建っ ていることからしても,山 陰道が整備される時期と近 い時期であることは確実で ある。 (土橋 誠)

参考文献

『埋蔵文化財発掘調査概報』 1967 『京都の社寺文化』1971

#### 長岡京跡調査だより

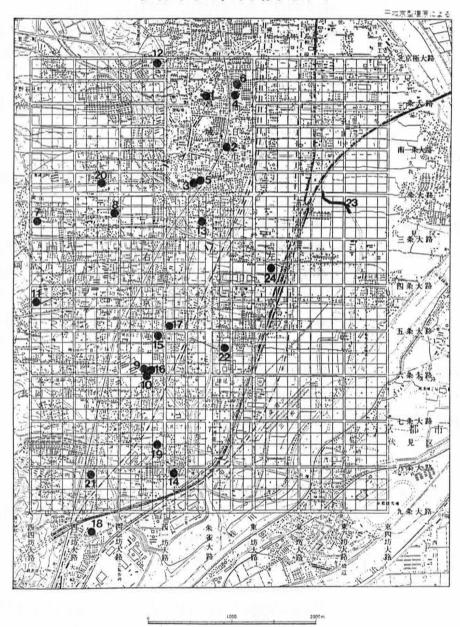
この10月から12月にかけて、長岡京跡では下記表のとおり計24件の調査が行われた。うちわけは宮跡6件、右京域15件、左京域3件であった。これらの調査のうち、長岡宮跡第137次調査では、倉庫と思われる礎石建物が検出され、長岡京跡左京第102次調査では、長岡京跡で初例の井籠組の井戸を検出するなどの多大な成果があった。それでは以下に、10

	調査次数	地区名	調 査 地	調査機関	調査期間
1	宮内第 137 次	7AN12E	向日市寺戸町西野辺3	向日市教委	9. 1~11.24
2	宮内第139次	7AN9L-2	向日市鶏冠井町荒内地内	"	9.19~10.5
3	宮内第 140 次	7A N15 J	向日市上植野町御塔道7-5	(財)京都府埋	10.11~11.20
4	宮内第 141 次	7AN3B	向日市森本町下森本30	向日市教委	11. 4~11.20
5	宮内第 142 次	7A N15K	向日市上植野町御塔道7-9	"	11. 8.9
6	宮内第143次	7A N13E	向日市寺戸町岸ノ本25-149	"	11.14~12.14
7	右京第138次	7AN J K K	長岡京市長法寺北畠21	長岡京市教委	7. 23~ 7. 26 10. 24~12. 28
8	右京第 141 次	7ANIST-5	長岡京市今里3丁目	(財)京都府埋	8.11~10.24
9	右京第142次	7ANMSI-3	長岡京市開田 4丁目428-1	(財) 長岡京市埋	9. 5~10. 5
10	右京第 143 次	7ANMMK-3	長岡京市神足 3 丁目208-4	"	9. 21~10. 11
11	右京第144次	7ANIMO	長岡京市南平尾10-1	"	10. 6~11. 8
12	右京第 145 次	7ANBNO-2	向日市寺戸町西野32	向日市教委	10.19~11.14
13	右京第 146 次	7ANFZG-3	向日市上植野町地後3	"	11. 6~12. 1
14	右京第147次	7ANTOT	大山崎町下植野梅ケ畑地内	大山崎町教委	11. 7~11.16
15	右京第148次	7ANKHT-2	長岡京市開田 3 丁目	(財)京都府埋	11.10~12.23
16	右京第149次	7ANMSI-4	長岡京市開田 4 丁目 424	(財) 長岡京市埋	11.14~12. 1
17	右京第 150 次	7ANKS I-4	長岡京市開田2丁目12-12	"	11.18~12. 6
18	右京第 151 次	7ANSND	大山崎町大山崎西高田地内	大山崎町教委	11.19~11.22
19	右京第 152 次	7ANQNK	長岡京市久貝1丁目130	(財) 長岡京市埋	12. 1~12.15
20	右京第153次	7ANIAE-2	長岡京市今里4丁目	(財)京都府埋	12. 9~
21	右京第 154 次	7ANSSG	大山崎町円明寺里の後32	大山崎町教委	12.12.13
22	左京第 102 次	7ANMST-3	長岡京市神足芝本8・9	(財) 長岡京市埋	8. 18~10. 25
23	左京第 104 次	7ANWYD WID	京都市伏見区西出町	(財)京都市埋	11.21~
24	左京第 106 次	7ANFTB-3	向日市上植野町十ケ坪	向日市教委	12. 1~

長岡京跡調査地一覧表

月26日・11月24日・12月21日にそれぞれ行った長岡京連絡協議会で報告された各調査のうち、おもだったものを紹介したい。

## 長岡京条坊復原図



数字は本文()内と対応

宮内第137次 (1) 向日市教育委員会

調査地は, 学校法人西山学園の敷地内で, 長岡宮跡の北半部分 に当り、北方官衙地区と呼んでいる場所である。平安京では「大 蔵」が存在する場所に当る。ここでは、礎石を持つ建物跡の一部 が検出された。礎石建物跡は、東西1間分しか検出されていない が、南北は4間あり、周囲に雨落ち溝をめぐらしているのがわか った。この建物跡は、総柱で、倉庫である可能性が強い。また、 調査地の南方では、東西方向に延びる石組みの溝が見つかった。 **港の西端部には木桶が置かれ、港の掘形が広がっており、池の排** 水施設かもしれない。

宮内第139次 (2)

向日市教育委員会

長岡宮の内裏公園の隣接地で行われた調査で、内裏築地回廊の 柱跡を検出した。

宮内第140次 (3)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は,長岡宮の朝堂院西方官衙域にあって,ほぼ二条第二 小路の延長線上に当る。この調査では、幅2m・深さ0.4mを測 る東西方向の溝を検出し、多量の瓦がこの溝の南側に落ち込んだ 状態で出土した。平瓦・丸瓦のほか、軒平瓦2点、鴟尾片、そし て吹子の羽口や鉱澤が出土している。

宮内第141次 (4)

向日市教育委員会

木簡が出土したほか、縄文土器や石器が出土した。

宮内第143次 (6)

向日市教育委員会

長岡京期の杭列が検出された。調査地は、北辺官衙域に当り、 あるいは, 官衙の何らかの施設に関連するものかと思われる。

右京第138次 (7)

長岡京市教育委員会

七ツ塚古墳群の5号墳の周濠を検出した。幅約4m・深さ約 0.15 m を測る。その他中世の土城や落ち込みを検出した。

右京第141次 (8)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中世の石敷きと、長岡京期の南北溝を検出した。調査地は、西 二坊大路推定地に当るが、検出した長岡京期の南北溝は、東に振 れ, また以前の調査で検出した西二坊大路西側溝の延長ラインか ら東へ約 6m ずれる。

右京第143次 (10) (財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期の掘立柱建物跡4棟を検出した右京第135次調査地の 北接地である。今回は柱穴1が検出されただけだが、この柱穴は 木簡や墨書土器が出土した右京第102次調査の東西溝の延長上に 位置する。

右京第144次 (11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京の瓦を焼いた大鼓山瓦窯跡に当り、窯跡はみつからなか ったが, 軒丸瓦が出土した。

右京第148次 (15)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、右京六条二坊一町に当り、五条大路に近接している。 近辺では五条大路の南北両側溝や長岡京期の掘立柱建物跡が多数 検出されている。この調査地では、東西5間で南側に庇を持つ掘 立柱建物跡の庇部分を検出した。

左京第102次 (22)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は, 左京六条一坊七町に当り, 長岡京期の井戸・掘立柱 建物跡・溝・土広等が検出された。井戸は、1辺約1.5mの井籠 組の井戸枠を備えたもので、長岡京跡では初めての検出である。 ただ,以前向陽高校の立会調査に伴い井戸枠の板材一枚が出土し ている。今回出土の井戸枠は、最下段部で、各辺中央に枘穴が穿 たれ、楔が打ち込まれてあり、北東隅・南西隅に井戸枠を固定し た石があった。また、この井戸には排水溝が取りつけられていた。

左京第104次 (23)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査地は、三条第一小路・東三坊大路・東三坊第二小路・二条 大路等の推定地に当る。この調査で三条第一小路南北両側溝・東 三坊大路東西両側溝等が検出された。また、三条第一小路の南側 では,長岡京期の南北2間・東西2間以上の掘立柱建物跡が検出 されている。このほか、縄文時代の自然流路もみつかり、北白川 (山口博) 上層式の土器片が出土した。

#### センターの動向(58.10~12)

#### 1. できごと

- 10. 4 千代川遺跡第 4次 (亀岡市, 府立亀 11.25 千代川・桑寺遺跡 (亀岡市, 道路拡 岡養護学校敷地) 関係者説明会実施
- ニティセンター建設予定地) 発掘調査 開始~11.13

号バイパス関係)発掘調査開始~11.30

- 10.15 千代川遺跡第4次(亀岡市,府立亀 大阪文化財センター主催第1回近畿 地方埋蔵文化財担当者研究会一於大阪 市中央公会堂一で、小山雅人「京都府 における最近の発掘調査事例」発表
- 10.20 隼上り遺跡 (字治市, 京滋バイパス 関係) 発掘調査開始
- 10.23 京都市埋蔵文化財調査センター主催 第7回調查成果交流会一於同志社大学 原畑窯跡群|発表
- 10.26 長岡京連絡協議会開催
- 10.31 定例職員会議で大阪文化財センター 12.21 長岡京連絡協議会開催 制作の映画「河内平野を掘る」を上映 12.28 昭和58年仕事納め
- 11.10 長岡京跡右京第148次(長岡京市,府 道拡幅工事予定地) 発掘調査開始
- 11.11 長岡宮跡第140次(向日市,コミュ 10.1~2 第17回研修会一於丹後町一開催 ニティセンター建設予定地) 関係者説 明会実施
- 11.22 重要文化財三宝院宝篋印塔基壇(京 都市伏見区) 発掘調查開始

- 11.24 長岡京連絡協議会開催
  - 幅工事予定地) 関係者説明会実施
- 10.11 長岡宮跡第140次(向日市,コミュ 12.2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿 ブロック会議一於大阪市一出席(栗栖 事務局長, 白塚総務課長)
  - 千代川遺跡第5次(亀岡市,国道9 12.9 長岡京跡右京第153次(長岡京市今 里, 道路拡幅工事予定地) 発掘調査開 始
- 岡養護学校敷地)発掘調査終了6.20~ 12.15 第8回役員会及び理事会一於パレス サイドホテルー開催 福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長,岸 俊男,藤井 学, 川上 貢, 足利健亮, 中沢圭二, 佐原 真, 原口正三, 武田 浩, 東条 寿各理 事, 栗栖常務理事, 岡田忠司監事出席
  - 12.18 北金岐遺跡(亀岡市, 国道9号バイ パス関係) 現地説明会開催,約60名参 加
  - 新町校舎一で,石井清司調査員「篠石 12.20 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡に関す るスライドによる説明会一於日本道路 公団福知山工事事務所一開催

#### 2. 普及啓発事業

第1日目(発表者及び題名)岡田晃治 「最近の丹後地域分布調査について」 山口 博「竹野川流域の古墳につい て|田中光浩「峰山町途中ケ丘遺跡の

発掘調査について 第2日目 丹後町 | 大成古墳群, 産土山古墳, 蝙蝠穴古墳, 竹野遺跡, 竹野神社, 神明山古墳, 願 興寺 3 号增, 伊根町字良神社, 宮津市 丹後鄉十資料館見学, 参加者47名

- 10.15~11.23 奈良県立橿原考古学研究所附 属博物館主催「三世紀の九州と近畿」 展に出品協力
- 10.17~11.7 京都産業大学「神山祭」展示 に遺跡パネル2枚出品協力
- のあけぼの展 に, 三河宮ノ下遺跡出 土遺物44点を出品協力
- の歴史資料展」に,太田遺跡他出土遺 物 181 点,遺物写真パネル6枚出品協 ナ
- 11. 5 第18回研修会一南山城の文化財を訪

- 住車塚。南塚古墳,酬恩庵,加茂町浄 瑠璃寺, 山城町山城郷土資料館「特別 展山城の古瓦| 等見学, (講師) 飛田 範夫 <庭園解説>, 佃 忠夫 <建築 解説>, 高橋美久二 < 特別展解説 > 参 加者66名
- 11. 6 亀岡の歴史資料展講演会一於亀岡市 立図書館一講演 村尾政人「口丹波の 弥生時代 |, 引原茂治 「医王谷3号墳 の発掘調査成果について
- 11.1~11.30 舞鶴市教育委員会主催「郷土」12.17 第19回研修会一於京都社会福祉会館 一開催, (発表者及び題目) 山本輝雄 「長岡京市恵解山古墳の発掘調査」、大 槻真純「福知山市池の奥古墳群の発掘 調查」, 中村孝行「綾部市菖蒲塚・聖 塚古墳の発墳調査 (特別講師及題目) 樋口隆康「京都府の古墳文化」,参加 者106名
  - ねて一開催,八幡市松花堂,田辺町大 12.26 『京都府埋蔵文化財情報』第10号刊行

#### 府下報告書等刊行状況一覧 (58.1~12)

#### 発掘調査報告書関係

『湯舟坂2号墳』(久美浜町文化財調査報告 第7集) 久美浜町教育委員会 1983.7 『久美浜町の古い遺跡』(同 第8集) 久美浜町教育委員会 1983.3

『丹後 大山墳墓群』(丹後町文化財調査報告 第1集) 丹後町教育委員会 1983.3 『丹後 竹野遺跡』(同 第2集) 丹後町教育委員会 1983.3

『扇谷遺跡発掘調査概要』(峰山町文化財調査報告 第9集) 峰山町教育委員会 1983.3

『日置遺跡発掘調査概要』(宮津市文化財調査報告 6) 宮津市教育委員会 1983.3

『中野遺跡第4次発掘調査概要』(同7)宮津市教育委員会1983.3

『丹後弓木城』(岩滝町文化財調査報告 第5集) 岩滝町教育委員会 1983.3

『入谷西A-1号墳』(加悦町文化財調査概要 2) 加悦町教育委員会 1983.3

『志高遺跡』(舞鶴市文化財調査報告 第4集) 舞鶴市教育委員会 1983.3

『和久寺跡第1次発掘調査概報』(福知山文化財調査報告書 第5集)福知山市教育委員会 1983.3

『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会 1983.3

『愛宕山古墳発掘調査概報』(京北町埋蔵文化財調査報告書 第2集)京北町教育委員会 1983.3

『史跡丹波国分寺跡第1次発掘調査報告書』(亀岡市文化財調査報告書 第12集) 亀岡市教育委員会 1983.3

『長岡京市文化財調査報告書』第11冊 長岡京市教育委員会 1983.3

『大鳳寺跡第 3 次発掘調査概報』(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第 2 集)宇治市教育委員会 1983. 3

『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』(同 第3集) 宇治市教育委員会 1983.3

『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第12集 城陽市教育委員会 1983.3

『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983.3

『北野廃寺発掘調査報告書』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第7冊) 同上 1983.3

『平安京跡発掘調査概報』(昭和57年度)京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究 所 1983.3

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』(昭和57年度) 同上 1983.3

『長岡京跡発掘調査概報』(昭和57年度) 同上 1983.3

『北野廃寺発掘調査概報』(昭和57年度)京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究 所 1983.3

『中臣遺跡発掘調査概報』(昭和57年度) 同上 1983.3

『御堂ケ池1号墳発掘調査概報』(昭和57年度) 同上 1983.3

『植物園北遺跡発掘調査概報』(昭和57年度) 同上 1983.3

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』(昭和57年度) 同上 1983.3

『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(昭和57年度)(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983.3

『埋蔵文化財発掘調査概報 (1983)』京都府教育委員会 1983.3

『京都大学構内遺跡調査研究年報』(昭和56年度)京都大学埋蔵文化財研究センター 1983.3

『マムシ谷窯址発掘調査報告書』(同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 14) 同志 社大学校地学術調査委員会 1983. 3

『公家屋敷二条家北辺地点の調査』(同 No. 15) 同上 1983.5

『平安京土御門烏丸内裏跡一左京一条三坊九町一」 (財)古代学協会 1983.12

#### 当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

#### 現地説明会

「洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡・山田館跡・城ノ尾城館跡」(京埋セ現地説明会資料 No. 83-01) 1983. 7. 30

「青野西遺跡」(同 No. 83-02) 1983. 8. 10

「木津川河床遺跡」(同 No. 83-03) 1983. 8. 23

「中山城跡」(同 No. 83-04) 1983. 9. 17

「北金岐遺跡」(同 No. 83-05) 1983. 12. 18

#### 中間報告

「長岡京跡右京第105次」(京埋セ中間報告資料 No. 83-01) 1983. 1. 22

「伏見城跡」(同 No. 83-02) 1983. 2. 25

「長岡京跡左京第98次 | (同 No. 83-03) 1983. 3. 7

「長岡京跡右京第127次」(同 No. 83-04) 1983. 5. 20

「長岡宮跡第134次」(同 No. 83-05) 1983. 6. 20

「木津川河床遺跡」(同 No. 83-06) 1983. 7. 8

「土師南遺跡」(同 No. 83-07) 1983. 7. 13

#### 京都府埋蔵文化財情報 第10号

「田辺城跡」(同 No. 83-08) 1983. 7. 26

「蒲牛遺跡」(同 No. 83-09) 1983. 8. 24

「千代川遺跡第3次」(同 No. 83-10) 1983. 8. 26

「上中遺跡」(同 No. 83-11) 1983. 9. 3

「旧洛南中学校構內遺跡」(同 No. 83-12) 1983. 9. 22

「長岡京跡右京第141次」(同 No. 83-13) 1983. 9. 26

「田辺城跡」(同 No. 83-14) 1983. 9. 27

「千代川遺跡第 4 次」(同 No. 83-15) 1983. 10. 4

「長岡宮跡第 140 次」(同 No. 83-16) 1983. 11. 11

「千代川·桑寺遺跡」(同 No. 83-17) 1983. 11. 25

#### 府下現地説明会資料

「権現山古墳第三次発掘調査」久美浜町教育委員会 1983. 8. 12

「扇谷遺跡発掘調査」峰山町教育委員会 1983. 8. 27

「大内1号墳発掘調査」大宮町教育委員会 1983. 3. 23

「小池古墳群発掘調査」大宮町教育委員会 • 平安博物館 1983. 11. 26

「日置遺跡」宮津市教育委員会 1983. 5. 21

「大島天神社発掘調査 | 宮津市教育委員会 1983. 8. 11

「日置遺跡第2次発掘調査」宮津市教育委員会 1983.10.25

「千原古墳・弓木城 | 岩滝町教育委員会 1983. 8. 26

「池の奥古墳群」福知山市教育委員会 1983.9.17

「和久寺跡第2次発掘調査」福知山市教育委員会 1983.11.19

「聖塚·菖蒲塚周濠試掘調査」綾部市教育委員会 1983.11.19

「史跡丹波国分寺跡第二次発掘調査」 亀岡市教育委員会 1983. 9. 10

「長岡京跡右京第119次 (7ANKSN-2 地区) 調査」長岡京市教育委員会 1983. 2.19

「長岡京跡右京第135次 (7ANMMK-2 地区) 調査」(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983. 7. 3

「長法寺南原古墳」長岡京市教育委員会 1983. 8. 6

「長法寺南原古墳」長岡京市教育委員会 1983.12.10

「長岡京跡左京第100次 (7ANEHD 地区)」向日市教育委員会 1983. 7.16

「物集女車塚古墳」向日市教育委員会 1983. 8. 20

「長岡宮跡第137次 (7AN12E 地区) 発掘調査」向日市教育委員会 1983.11.5

「下司古墳群発掘調査」同志社大学校地学術調査委員会 1983. 10. 29

「大畠遺跡第2次発掘調査」木津町教育委員会 1983.5.14

「大畠遺跡第3次発掘調査」木津町教育委員会 1983.9.24

「京都大学本部構内の発掘調査 (AT29 区)」京都大学構内遺跡調査会・京都大学埋蔵文化 財研究センター 1983.1.11

「北白川追分町遺跡の発掘調査 (BE 33 区)」 同上 1983. 6. 7

「京都大学医学部構内の遺跡 (AN 20 区)」 同上 1983. 9. 9

「法住寺殿跡推定地」法住寺殿跡遺跡調査会 1983. 9. 11

#### その他の雑誌・報告・論文等

『京都府埋蔵文化財情報』第6号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982.12

『京都府埋蔵文化財情報』第7号 同上 1983.3

『京都府埋蔵文化財情報』第8号 同上 1983.6

『京都府埋蔵文化財情報』第9号 同上 1983.9

『考古展 第2回小さな展覧会』 同上 1983.8

『京都の文化財』京都府教育委員会 1983.3

『丹後郷土資料館報』第4号 京都府立丹後郷土資料館 1983.3

『特別展図録 環頭大刀の発見』京都府立丹後郷土資料館・京都府立山城郷土資料館・京 都府立総合資料館 1983.9

「丹後郷土資料館だより」第10号 京都府立丹後郷土資料館 1983.3

『山城郷土資料館報』創刊号 京都府立山城郷土資料館 1983.3

『第1回特別展 山城の古瓦』京都府立山城郷土資料館 1983.9

「山城郷土資料館だより」創刊号 京都府立山城郷土資料館 1983.3

「第1回郷土資料展 みねやまの古代を見る」峰山町教育委員会 1983.7

『加悦町の指定文化財』(加悦町文化財調査報告 第5集) 加悦町教育委員会 1983.1

「後野円山古墳群」(加悦町文化財シリーズ2) 加悦町教育委員会 1983.3

『特別展 郷土のあけぼの』舞鶴市郷土資料館 1983.11

「掘りおこした郷土史」(第22回市民文化まつり文化財展) 長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983.11

『長岡遷都の前後』(第3回文化財講演会)(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983.11

『ガイドブック長岡京跡』(其の三 長岡京物語)京都乙訓ライオンズクラブ 1983.10

「長岡京」第26~28号 長岡京跡調査研究所 1983.3~6

『飛鳥へ運ばれた瓦』宇治市教育委員会 1983.3

『宇治市遺跡地図』宇治市教育委員会 1983.3

#### 京都府埋蔵文化財情報 第10号

『城陽の歴史をたずねて』城陽市 1983.3

『京都市考古資料館年報』昭和56 • 57年度 京都市考古資料館 1983.3

「京都考古」第28~30号 京都考古刊行会 1983.3~7

「太邇波考古」第3号 両丹技師の会 1983.9

『やましろ』第16号 城南郷土史研究会 1983.8

「波布理曽能 | 第1号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1983.11.3

『大江町誌』通史編上巻 大江町 1983.3

『大山崎町史』本文編 大山崎町 1983.10

『字治市史年表』字治市 1983.8

『史料京都の歴史』第2巻考古 平凡社 1983.3

#### 受贈図書一覧 (58.9~11)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業

小平市遺跡調査会

(財)滋賀県文化財保護協会

(財)大阪文化財センター

(財)枚方市文化財研究調査会 奈良国立文化財研究所 帝塚山考古学研究所

訓子府町教育委員会 胆沢町教育委員会 栃木県教育委員会 東京都教育委員会 多治見市教育委員会 滋賀県教育委員会

大津市教育委員会 柏原市教育委員会 加古川市教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報2,中尾(遺構編)

鈴木遺跡

延曆寺発掘調査報告書Ⅱ

大阪文化誌 第16号,第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料, 山賀(その1),若江北

枚方市文化財年報Ⅳ

条里制の諸問題 II, 平城宮出土墨書土器集成 I

帝塚山考古学 No. 1, 同 No. 2, 田辺市三栖廃寺遺跡発掘調査概要 N, 同 V, 田辺市立戸遺跡確認発掘調査概要, 二上山旧石器遺跡をめぐる諸問題, 考古学実習室だより No. 2, 古墳の謎を探る, 日・韓古代文化の流れ

日出-4・5遺跡, 大昔のくんねっぷ-1-

尼坂遺跡

下野国府跡 V

三宅島坊田遺跡

北丘古窯跡群 • 古墳群発掘調査報告書

滋賀県文化財調査年報 昭和 54・55・56 年度, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 IX-1, 湖岸堤管理用道路(川尻・菖蒲 I 区) 工事予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書, 高月町上水道事業に伴う埋蔵文化財調査概要 Ⅱ, 滋賀県中世城郭分布調査 1

田上里遺跡群発掘調査報告書,錦織遺跡発掘調査報告書Ⅱ

平尾山古墳群, 柏原市所在遺跡発掘調査概報

加古川市埋蔵文化財調査集報 I,加古川市広尾東遺跡,

加古川市砂部遺跡

#### 兵庫県教育委員会

岩手町教育委員会 鳥取市教育委員会 太宰府市教育委員会 宮崎県教育委員会

栃木県立博物館 君津市立久留里城址資料館 大田区立郷土博物館 小松市立博物館 福井県立若狭歴史民俗資料館 福井県立朝倉氏遺跡資料館

尖石考古館 愛知県陶磁資料館 名古屋市見晴台考古資料館 名古屋市博物館 豊田市郷土資料館 滋賀県立近江風土記の丘資料館 東大阪市立郷土博物館

奈良県立橿原考古学研究所附属 博物館

奈良国立文化財研究所飛鳥資料

天理大学附属天理参考館 橿原市千塚資料館 和歌山県立紀伊風土記の丘管理

島根県立八雲立つ風土記の丘 佐賀県立九州陶磁文化館

大分県立宇佐風土記の丘歴史民 俗資料館

早稲田大学考古学会 早稲田大学図書館 日本大学史学会 東京大学文学部考古学研究室 熊本大学文学部考古学研究室

朝鮮学会 埋蔵文化財研究会 朝日新聞社出版局プロジェクト 客 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書 II, 田多地小谷遺跡, 半坂峠古 墳群 辻遺跡, 魚住古窯跡群, 近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(1), 夕垣古墳群・夕垣遺跡発掘調査報告書, 沢原 5 号墳・高田 遺跡発掘調査報告書

西国府Ⅱ遺跡発掘調査概報

帆城遺跡・天神山遺跡調査報告,鳥取市文化財報告書13

今王 2 号墳, 大宰府条坊跡 Ⅱ 宮崎県文化財調査報告書 第26集

常設展示解説

君津市久留里城址資料館年報1~4 特別展 大田の祭りと民俗芸能 小松ゆかりの近代日本画工遺作展

鳥浜貝塚1981年・1982年度調査概報・研究の成果

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 XIV, 県道鯖江・美山線改良工事に伴な う発掘調査報告書

高部遺跡

愛知県陶磁資料館研究紀要2

見晴台教室'82

韓国古代文化展,新安海底引揚げ文物

甲胄展

近江の官衙 一墨書土器と硯一

弥生人のくらし

飛鳥の水時計

特別展 三世紀の九州と近畿

民俗楽器1 絃鳴楽器

企画展 貫頭衣を着た人々のくらし

発掘調査10年の成果 一昔のくらしと遺跡一

'83特別展 古代人の食生活

九州陶磁文化館年報 昭和57年度 No. 2, 佐賀県立九州陶磁文化館館 蔵資料目録<  $\Pi$  >

字佐風土記の丘歴史民俗資料館年報1982年度, 古代・中世字佐の仏たち

古代 第74号

古代 第74号

史叢 第31号

東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第2号

カミノハナ古墳群2,ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡

朝鮮学報 第107輯

木製農具について

古代史発掘 1978-82新遺跡カタログ

京都府立丹後郷土資料館京都府立山城郷土資料館京都府立総合資料館(財)京都市埋蔵文化財研究所

京都市埋蔵文化財調査センター

字治市 向日市教育委員会 舞鶴市教育委員会 丹後町教育委員会 久美浜町教育委員会 仏教大学図書館 花園大学考古学研究室 同志社大学校地学術調査委員会 (財)古代學協會

木 荻 中 高 真 岡 椚 密 繁 信 悌 昌 正 国 運 春 幸 郎 宏 郎 男 特別展図録 環頭大刀の発見 展示図録 2 山城の古瓦 洛中洛外図の世界

昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要,北野廃寺発掘調査報告書,常盤東ノ町古墳群,長岡京跡発掘調査報告,常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告,臨川寺旧境內遺跡発掘調査報告,旭山古墳群発掘調査報告,京都市埋蔵文化財研究所概報集1977—I,平安京跡発掘調査概報,坂東善平収蔵品目録,平安京跡発掘資料選

平安京跡発掘調査概報昭和57年度,中臣遺跡発掘調査概報昭和57年度,鳥羽離宮跡発掘調査概報昭和57年度,長岡京跡発掘調査概報昭和57年度,植物園北遺跡発掘調査概報昭和57年度,北野廃寺発掘調査概報昭和57年度,御堂ケ池1号墳発掘調査概報,京都市內遺跡試掘立会調査概報昭和57年度

宇治市史年表 ガイドブック長岡京跡 其の三 長岡京物語 志高遺跡,特別展 郷土のあけぼの 丹後大山墳墓群 湯舟坂 2 号墳 鷹陵史学 第 8 号 松源院境内香久山古墳 マムシ谷窯址発掘調査報告書

千手寺・日下遺跡発掘調査概報 福井考古学会会誌 創刊号 東仙坊・丸池山古窯址群 播磨千本屋廃寺跡 鶴尾神社 4号墳調査報告書 古代文化を考える 第九号 古代の土木設計

古代文化 第296号~第298号

情報第10号をお届けします。

本年度もあと3か月になり、当調査研究センターが実施いたしました発掘調査の成果もようやく出始めました。本誌巻頭に掲載しました木津川河床遺跡は、現木津川のすぐそばという、悪条件にもかかわらず営なまれた集落跡です。遺構の残存状態もよいので、最近注目を浴びるようになりました。

また,長らく本誌連載中でありました「古代エジプト遺跡を訪ね て」も,今回でいよいよ最終回になりました。

なお、本誌には昭和58年の京都府下報告書等刊行状況一覧を掲載 いたしましたので、よろしく御利用下さい。

(編集担当 土橋 誠)

## 京都府埋蔵文化財情報 第10号

昭和58年12月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究 センター

> 〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル 中御霊町424番地

TEL (075)256-0416

印刷 中西印刷株式会社 代表者中西 亨 〒602 京都市上京区下立売通小川東入 田 (075)441-3155 (代)